

OpenPNEのソフトウェアエージングに関する研究

東京都立大学 *近藤和希 KONDO Kazuki
会員 東京都立大学 肖霄 XIAO Xiao

1. 序論

現代では、ソフトウェアは私たちの身の回りから宇宙規模のシステムに至るまで、非常に長時間の連続稼働が必要なものが多く存在する。そのような連続稼働によって予期しない性能劣化が生じる現象は「ソフトウェアエージング」と呼ばれ、特に高可用性が要求されるソフトウェアにおいては、ソフトウェアエージングのリスクを定量的に評価する必要性が高まっている。

本研究では、ソフトウェアエージングの研究対象として、SNSシステムの一つであるOpenPNE¹を選択する。動機付けは、X²のようなSNSシステムは、高い拡張性を持ち、膨大なユーザー数を抱えており、企業にとってサーバー運用のリスクが高まっているためである。また、これまでのソフトウェアエージングに関する研究の中で、SNSシステムを対象にしたものは、調査の限らない。本研究では、Measurement-based Approach[1]に基づき、SNSシステムの特徴を踏まえた負荷シナリオを設定し、各シナリオに対して、負荷期間と監視期間[2]を設けることで、SNSシステムにおけるソフトウェアエージングのリスクを調査する。

2. 実験環境

図1に示す実験環境は2台のデバイスで構成されている。サーバーPCでは、Dockerを用いてWindows OSとOpenPNEの運用環境を隔離している。この設定によりOpenPNE環境を独立させ、移植性が向上し、クリーンなメトリクスの取得が可能となる。クライアントPCにJMeterをインストールし、LANケーブルでサーバーPCと接続する。物理的な接続による影響のリスクはあるが、通信関連の外的要因は排除できる。

本研究で使用する物理デバイス及び、メトリクスとその収集方法は以下の通りである。

- サーバー PC:
 - * スペック: [CPU] Intel(R) Core(TM) i9-13900 3.00GHz, [RAM] 16.00GB, [OS] Windows 11 Pro (23H2)
 - * メトリクス: CPU 使用率, メモリ使用量
 - * 収集方法: Docker stats³コマンド

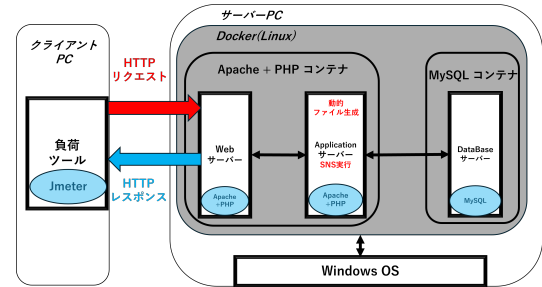


図1: SNS運用環境と負荷ツール

表1: エラー率とサーバーの性能限界

負荷 [RPS]	5	10	15	20
エラー率 [%]	0.36	3.08	28.51	43.26
性能限界 [RPS]	4.98	9.69	10.72	11.35

- クライアント PC:
 - * スペック: [CPU] Intel(R) Core(TM) i7-6600U 2.60GHz, [RAM] 8.00GB, [OS] Windows 10 Enterprise (22H2)
 - * メトリクス: エラー率
 - * 収集方法: Jmeter⁴

3. 実験

本実験では、0hから1hの間に10,000スレッドを立ち上げ、その後1hから25hを負荷期間として設定する。さらに、Torquatoら[2]を参考に、25hから27hを監視期間として設定し、10RPSの負荷を与え、メトリクスを監視する。なお、RPS (Requests Per Second) は負荷の大きさを表す単位である。

3.1. 本実験環境の性能調査

本節では、負荷を5RPS, 10RPS, 15RPS, 20RPSで与え、用意したサーバーの性能限界を推測する。

表1にエラー率とそれに基づいて推測されたサーバーの性能限界を示す。性能限界は、1秒間に正しく処理できるリクエスト数とし、性能限界 = 負荷 × (100% - エラー率) により計算する。表1から、本実験環境の性能限界は9RPSから11RPS程度であると推測する。なお、本節の実験では監視期間を設定していない。

3.2. シナリオ 1: 一定負荷 (監視期間 2h)

本節では現実の定常的な状況を想定した一定負荷のシナリオを考える。3.1節の結果を踏まえ、負荷を5RPS,

¹<https://www.openpne.jp/about/>

²<https://about.x.com/ja>

³<https://docs.docker.com/reference/cli/docker/container/stats/>

⁴<https://jmeter.apache.org/>

10RPS, 15RPS と設定して, 3 種類のメトリクスデータを得た. スレッド立ち上げの影響が残る負荷期間の最初の 15 分を除いたデータに対して, Mann-Kendall 検定 [3] と Sen の傾き推定 [4] を行った結果, 前者は帰無仮説が棄却され, 後者は傾きの推定値が正であることから, OpenPNE のサーバーにソフトウェアエージングのリスクが確認された.

3.3. シナリオ 2: 増加負荷 (監視期間 2h)

本節では, 3.1 節より推測した性能限界の範囲内で負荷を段階的に増加させ, 現実における注目度が高まる状況を想定する. 具体的には, 1h から 25h の間に, 1RPS から 15RPS まで線形に負荷を増加させる.

図 2, 図 3, 図 4 は, 3 種類のメトリクスの時系列変化を示している. スレッド立ち上げ期間中は負荷の大きさにより, 各メトリクスが比較的高い値を示している. 増加負荷の期間では, 負荷の増加に伴い, 全メトリクスが増加していることが確認できる. 特にエラー率は, 負荷が約 10RPS 程度に達する 16 時間ごろから急激に増加しており, 推測された性能限界の妥当性が確認された. また, CPU 使用率とメモリ使用量については, 同時帯までは増加傾向にあったが, それ以降は急激な増加は見られなかった. 3.1 節と 3.2 節の結果と合わせて考えると, メモリ使用量が CPU 使用率よりも先に限界に達したことが, エラー率上昇の原因と考察する. これは, サーバー運用において予算が限られている場合, 高性能な CPU を用意するよりも, メモリ容量を増やす方が効果的であることを示唆する.

さらに, 3.2 節と同様に, Mann-Kendall 検定 [3] と Sen の傾き推定 [4] を行った結果, 増加負荷シナリオにおいても, OpenPNE のサーバーにソフトウェアエージングのリスクが確認された. また, 監視期間におけるエラー率は, 直前の負荷期間のシナリオによって異なる振る舞いを見せていることが確認された.

4. 結論と今後の展望

本研究では, 比較的シンプルな SNS 設定を用いて, サーバーの性能限界を推測し, 比較的低い一定負荷でもソフトウェアエージングのリスクが存在することを確認した. また, 監視期間のエラー率の振る舞いが負荷期間のシナリオによって異なる現象は確認されたものの, 同期間の CPU 使用率やメモリ使用量の振舞いに同様の傾向は見られなかったことから, 追加のメトリクスの観察が必要であると考えられる. 加えて, 本実験では意図しないメモリ使用量の制限が確認された. 具体的には, Docker で APACHE + PHP コンテナに割

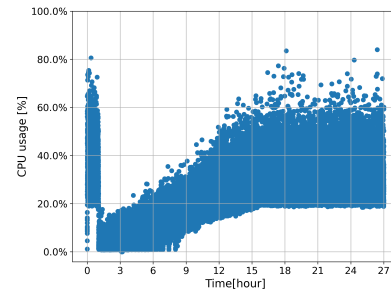


図 2: CPU 使用率

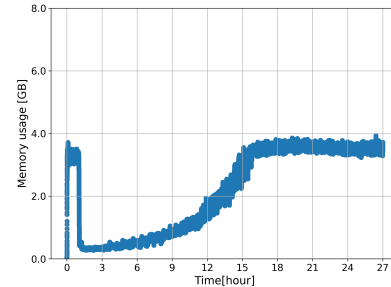


図 3: メモリ使用量

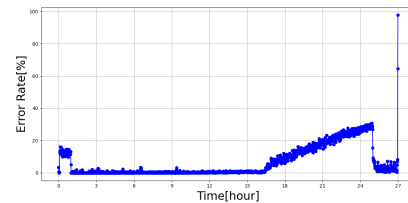


図 4: エラー率

り当てたメモリは 16GB であるが, 実際のメモリ使用量は 4GB(25%) 以下で停滞している. この現象の原因究明及び, ソフトウェアエージングとの関連性の解明が課題として挙げられる.

今後は, より高度な拡張機能を追加し, 適切な設定を整えた上で, ここで得られた知見の検証を行うことが課題である. また, 近年では, SNS だけでなく, 多くの Web サーバーはクラウド環境で運用されている. 従って, 今後は OpenPNE をクラウド環境にデプロイし, より現実的な負荷テストを実施することが望まれる.

参考文献

- [1] T. Dohi, K. Trivedi, and A. Avritzer, *Handbook of Software Aging and Rejuvenation*, New Jersey, USA: WORLD SCIENTIFIC, pp. 73–90, 2020.
- [2] M. Torquato, J. Araujo, I. M. Umesh, and P. R. M. Maciel, “SWARE: A methodology for software aging and rejuvenation experiments,” *Journal of Information Systems Engineering & Management*, vol. 3, pp. 15, 2018.
- [3] H. B. Mann, “Nonparametric tests against trend,” *Econometrica*, vol. 13, no. 3, pp. 245–259, 1945.
- [4] P. K. Sen, “Estimates of the regression coefficient based on Kendall’s tau,” *Journal of the American Statistical Association*, vol. 63, no. 324, pp. 1379–1389, 1968.